

よい語り わるい語り 17 ものがたりライブに幼児が来たとき考えること  
(2018/8/14)

図書館や公民館でするものがたりライブが小学校と大きく違うのは、  
さまざまな年齢がまじることだ。

親子連れが中心になる。

とくに地方では図書館の数はかぎられるし、地域も広いから  
町はずれに住む子は自分だけでは図書館まで来ることができない。

どうしても親が車をだしていっしょに来ることになる。

ぼくのがたりライブに来る子はたいてい小学生だが  
土曜日日曜日にわざわざ図書館に来るわけで、本好きが多いと予想できる。  
親の方も日頃、周辺のイベント情報に目配りできる高いアンテナを持ち、  
なおかつ、子どもといっしょに電車や車で図書館まで来るくらい  
フットワークがいいと予想できる。

大人だけのグループも来るが、これは自分も語りや  
絵本の読み語りをしているとか、近隣の小学校や保育園で先生をしているとか  
どこかで本か子どもにかかわっている人が多いと予想できる。

ぼくの頭の中にはそんな予想が入っている。

だから、全然本など読まない子もいる小学校でするより、  
少し話のグレードをあげても大丈夫だろうと、おおざっぱに判断して  
ステージに立つ。

逆に言うと、いつも図書館や文庫で語りをやっている人がたまに  
小学校に語りをやりに行くと、聞いてくれない子や騒がしい子が  
大勢いて衝撃をうけることになる。

図書館でだけ語っていると、つい、すべての子どもは本好きのような  
錯覚におちいりやすい。

そうではない。

無惨な言い方だが、本好きといえる子は今の子ども世界では少数派だ。

図書館が本好きな子が集まってきている場所にすぎないのだ。

だが、そのおかげで図書館での小学生と大人を対象にしたおはなし会は、  
本好きばかりが集まって、ひとつ上の世界を楽しめる場になる。

だから図書館の語りは語る側も聞く側も喜びに満ちているし、  
それはそれでとても意味があるのだ。

で、そんな図書館での語りで、気を使うのが乳幼児もまざっているということ。

これは、兄弟の上が小学生で、下が幼稚園か保育園と言うケースが多い。

下の子はまだものがたりを楽しむ年齢ではないけれど、上の子が「行きたい」と言ったり、親が「上の子を連れて行ってやりたい」と思ったとき、だが下の子もいっしょでなければ動けないというわけで、まあ、しょっちゅうあることだ。

図書館によってはそんなケースのために時間中、ものがたりライブや講演会の時、託児室を別に用意して乳児の世話をひきうけることもある。こういう時、ぼくが最初と最後に挨拶によるのは託児室だ。たいていは年配の女性が数人、そろいのエプロンをかけてニコニコして小さい子の世話をしている。

中には手のかかる子だっているだろうに、ほんとに頭が下がる。こういうところを引き受けてくれる人のおかげで、図書館を利用するみんなが、少しずつ息がしやすくなっている。おうおうにして、講師のぼくの方がえらい人のように思われて当惑するが、ぼくと託児係は、ぼくが大人と小学生以上に楽しい時間を提供し、託児係が同じ時間、乳幼児に楽しい時間を提供するという対等の関係だ。分担作業と言ってもいい。だから互いにリスペクトし、気づかいする関係でないとうまくいかない。とくにこちらの時間が伸びないよう、心がける。

で、託児は例外。

話を戻して事前に「ものがたりライブの会場に幼児がいてもいいですか」と図書館の担当の人から問い合わせが来ることがある。

これは参加希望者から問い合わせがあったのかもしれない。

「オーケーです」と答える。

実はぼくは主催者がチラシを作る段階で、[チラシに最初から「乳幼児も可」とはあえて書かないでください、「小学生から大人まで」としてください]と申し添えているので、こういうことになるのだ。

「乳幼児可」と書くと、「とにかく乳幼児も受け入れてくれるイベントならなんでもいきます」という親が、今のこの国にはけっこういて、小さい子をつれてくる。

会場がじっとすわってられない幼児だらけになる。

これはこれで同情すべき点、社会問題と思う点など、考えさせられることはたくさんあるが、

まったく聞かぬ気がない子を、親の思い入れだけでつれてこられると、最初からさわいだり走ったりする子もいて、本人も、話をまともに聞きたい子も、ぼくも、みんな不幸になってしまう。

これはやはり、別枠で「図書館で乳幼児向けの絵本や昔話の会をやってください」とお願いしたい。

そこで、乳幼児が親といっしょに簡単なものがたりを楽しむことは、それ自体がとてもいい時間であると同時に、ものがたりの海に航海に出るための初心者向けトレーニングにもなっている。それをうけて「よし、もっといっぱいものがたりを知りたい、聞きたい。ものがたりの外洋航海へ出るぞ」と自分からその気になった子をぼくは見習いクルーとして受け入れて、船長としてもっと遠くのものgatりの海に連れて行ってあげたい。

また、「乳幼児可」とチラシに書いてしまうと、それだけでなく図書館のおはなし会は乳幼児向けという印象があるのに、小学生が「あ、赤ちゃん向きの会だな」と思って来なくなってしまう。

幼児向きのお話を得意とする人はいて、その場合は「幼児向き」と書けばいい。だが、ぼくの話の場合は幼児よりも、もう少し子どもなりの人生体験と知識を持った小学生が聞いた方が絶対おもしろいと思っているので、幼児ばかり来たら本末転倒になってしまう。

ただし、先に書いた通り、小学生のおにいちゃんおねえちゃんの都合で、オマメとして会場に幼児がいるのは全然かまわないのだ。

静かにさえしていれば。

むずかりだしても、横にいる親がちゃんと空気を読んでなんとかしてくれれば。

そこを親がうまくできずにもたもたしていると、だんだんおかしい空気になっていく。泣き出したり、しゃべりだしたりしたら、もうその子は話のすじには戻れない。

それを親がまだ大丈夫だと思って、または自分はちゃんと子どものめんどうを見ていると周囲にアピールする意味で「静かにしなさい」と小声で何度叱っても、役に立たない。そのあいまにも、ぼくの話は進んでいるので、もう、その子にはわけがわからなくなっているのだ。

さらにいうと、親は子どもの泣き声になれているから、これくらいならまだ大丈夫だと思っていることが多い。

だが、その頃には周囲の人は話に集中できなくて切れかかっている。

つまり、この子が退場することが本人にとっても、まわりにとっても、ぼくにとっても幸せな状況になっているのだが、それを親がすみやかに判断して実行できない。

で、これがスムーズにいかない場合、どうするか？

いくつか選択肢がある。

ひとつは無視して続行すること。

だが、ここで乳幼児の泣き声・話し声がか聞こえないことにして話をつづけても、その状況は他の大勢の我慢の上になりたっている。

その我慢が、空気が読めていない一人の親の顔をたてるためになされたとして、そのお話会が成功したとはとうてい言えないだろう。

次の選択肢はぼくが話を一回切って、その親に「大丈夫ですか？ 一度、外に出たらきつとお子さん落ち着きますよ。それで機嫌が直ったら、また入って来てください」と言うこと。

親だって、満座の中でそんなことを言われたくはないだろう。

人によっては恥をかかされたら過剰に反応してしまうかもしれない。

ぼくだって言いたくはない。

だが、ぼくはものがたりの航海にみんなをつれだす船の船長で、他の大勢の人を楽しませてほしいと図書館から頼まれ、それを請け負っている。

船が沈没しそうになったら、それを回避する責任がある。

だから子どもの声が大きくなったり、泣き止まなかったり

他の客の視線がすべてそちらに行くようになって

「さすがにこのまま続行は無理だ」となったら、言わざるをえない。

もちろん、そこまで作ってきたものがたりのムードを自らこわすことになるからやりたくはないが、しかたない。

もっとも、これはそのとき、なんの話を語っていたかというのも関係する。

短めの笑い話なら、どこで話を切っても、そんなに影響はない。

もともと軽い話だし、多少のざわめきの中でもできる話だし。

だが、ぼくの方から見て、これが今日のメイン料理ですよという長めの話や、だんだんこわくなっていくおばけ話、しんみりした話などだとぼくも途中で切りたくないからつらいことになる。

おそらく一番いいのは会場にいる図書館や公民館のスタッフがそっと近づいて

「大丈夫ですか？ ちょっと外にでましようか」と小声でうながすことだ。

これを居丈高にやってはなにもならないが、ニコニコしながら扉まで静かに誘導してくれれば、ぼくは話をそのまま続けていられるし、客もホッとすると、その子にも親にもいいのだ。

上の子は会場に残しておいてくれてオーケーだ。

そっちの子はぼくが話ながらアイコンタクトして、改めて話に誘い込む。

で、これも、その辺の役どころがわかっている気配りできるスタッフがいる図書館と、

ただ、ぼうぜんとしているだけのスタッフがいる図書館とがあるから、  
今度は気の利かないスタッフにイライラさせられることもあるが、  
これ以上はケースバイケースだからどうしようもない。

で、まとめになるが  
オマメで来た幼児もちろん、会のじゃまをしないでくれればオーケーなのだ。  
幼児だって、聞く素養のできている子は背伸びして聞いてくれる。  
だから小学生の中に幼児がいくらか混じるのはなんの問題もない。  
ぼくの話は幼児に今はジャストミートはしないだろうが、  
話というのは、誰だって少し背伸びして  
わかったようなわからないようなところはなんとなくわかった気になったり、  
なんとなくスルーしたりして楽しむものだ。

全部、こまかいところまでわかる必要は全然ない。  
いっしょにいて、なんとなくまわりの人が笑ったり、こわがったりしている空気を  
感じて、雰囲気包まれていてくれればそれでいいのだ。  
大人だって昔の景色や風俗など、こまかくつっこまれたらわからないことだらけだが  
話のすじを追うのに別に困っていない。

こう書きながら、自分がうんと小さい時、母親につれられてディズニーのアニメの  
「白雪姫」を見に行ったときのことを思い出した。  
ラストの、お妃が魔女になって毒りんごを持ってくるところで  
ぼくは「こわいこわい」と大泣きして、母親がぼくを抱いてロビーに出ざるをえなかった  
のだそうだ。

おかげで母親はぼくを喜ばせてやろうと映画館に連れて行ったのに、  
逆に自分はクライマックスを見逃したことになるので  
「ごめんなさい」と言うしかないが、でも、他のお客のためには  
出てくれてよかった。

そうしてまた、こういうボタンのかけちがいのような体験をどの親も  
どの乳幼児もして、大きくなっていく。

大人と子どもとみんなで行くというのは、それをまるごと受け入れるということなので  
ものがたりライブで時おり乳幼児が泣くのは、  
織り込み済みということで、あまりカリカリしないでいたい。